

アイシャに訪れた危機



と救世主(スライム)

「ふうん、それはアイシヤが悪かったんじゃない?。」

「ん、やっぱしそう思う?。」

ここはアダマンティウス・リベラティオ敷地内にある
総合研究施設

「ヴァルプレオス」

この施設はマーゴハンター専門病院や研究施設、
アニメウエポンやサブアニメの開発、製造
すを行える工房が併設されている
大規模施設である。

今日はマーゴ、クリステッラにレントを人質に取られ、
彼女を救出した3週間後。

アイシヤが今いるのはヴァルプレオス内の
研究処置室前のロビー、
そこで世間話をしているのは以前様々な経緯で特区入りし
仲良くなったスライムの少女、リィムである。

「それで謝られたレントは喜んでたの?。」

「いや、凄く悲しい顔された、多分あれ怒ってたよなあ……。」

「今のボクでもなんとなく分かるけど、例えばボクの失敗を先生に謝られたらなんで? って思うし、多分なんか嫌だよ。」

「そっかあ……そうだよな、悪いことしちゃったな。」

今2人が話しているのはレントが目覚めた時にアイシヤが巻き込んだ事を謝罪してしまった件についてである。

「でもじゃあなんて言ったら良かったのかなあ。」

「さあ?、そんなの分かんない。」

「そんな、ハシゴ外しなよう。」

宙ぶらりんな気持ちのまま突き放された事に口を尖らすもスライムの友人は特に気にすることなく目の前の端末の画面とにらめっこの最中だ。

「ボクより長く人間やってるんだから自分で考えてよ、ボクは人間の事はまだ勉強中なの。」

「もう、で、どんな感じ?。」

「うん、ボクこれ作ったヤツ超嫌い、性格悪すぎる。」

それは件の人質事件直後の事である。

救出部隊の中に偶然近くに居合わせアイシヤ達の危機を知った彼女達の主治医が同行する事になったのだが、主治医は運び出されたアイシヤの状態を診てある異常に気付き処置を行った。

その後の精密検査でアイシヤがマーゴの十字礫より受けた電撃、あれ自体に特殊な術が混入されており、それが今もアイシヤの体中の神経に絡んだままなのだという。

「時間差で起動するとか、マーゴハンター狙いすぎてホントいや。」

更に調べるとその電撃には浴びせられた者がエネルギーを使う事で術が発動する。時限式の罠が仕込まれていた。

「でも良かったのは脳みそとかに
いってなかった所かな。」

「…大方人質を殺す時に意識を失わせないように、
とかそういう理由なんだろうけど。」

データを眺めながら独り言ちるリィムだが、
あ、あれ聞かなきゃ。
と何かを思い出しアイシヤにある事を聞いたです。

「所でその腕輪、外してないよね？」

「もちろん、先生の言った事は守りますとも、今回はちよつと洒落になつてないしね……。」

アイシヤは装着された腕輪を眺める。

この腕輪はマーゴハンターの力、特にエネルギーの類を一切使えないようにする効果のある腕輪である。

アイシヤの状態から推測した主治医が緊急時の特例として使用したのだ。

「で、付け心地はどう？、不慣れな事は無い？」

「うん、とね、ドアの角に小指ぶつけた、痛すぎた、人間慣れつて怖いなと思いました。」

エネルギーの使用全てを封じるという事は、普段無意識下でも貼っているバリアさえも使えない、という事である。

だがもしも術が発動していたら、淫気の根はアイシヤの神経をズタズタに引き裂き、そのままの状態で融合してしまうだろうという事だった。

その際に襲い来るであろう激痛は想像を絶するものになるだろうし、更に融合時、痛みをそのままにするだろうと予測され、そんな状態に晒さされればたとえマーゴハンターと言えど、良くて再起不能、悪くて……、という分析で、それを聞いたアイシヤも流石に背筋に寒いものが走ったという。

「後、あの人達が仲良くしてくれない。」

と、窓際に立つ男性に手を振るアイシャ、しかし男は微動だにしない。

彼はアダマンティウス・リベラティオの言うなれば
隠密部隊に所属する1人で
今回の腕輪の監視任務を行っている。

「昔の話聞くと、あるんだろうなあって思ってたけど
想像以上にヤバイんだろうねこの腕輪。」

その昔アダマンティウス・リベラティオと
マーゴハンターが激しく争った時代があるという。
それはアイシャの師匠が新人だった頃くらいの
時代の話なので、

アイシャ自身話に聞いただけで現実味は無かったのだが、
こういう物があると知ると
嫌が負うにもそういう事があったのだと実感してしまう。

その扱いは超嚴重で、
この3週間アイシャの行動の殆どに
彼らの監視と護衛が付いている。

「よし、じゃあ始められるね。」

「…ねえ、その難しそうなの分かるの?。」

「そりゃあ分かるよ。」

リイムは特区入りした後、
配達業に勤しんでいたのだが、

ヴァルブレオスへの配達の際に
施設内の様々なものに好奇心を刺激され
度々職員を質問攻めにする事があったという。
その中でアイシヤの主治医と出会い意気投合、

特に勉強する楽しさに目覚めたらしく
配達業の傍らここに来ては主治医の手伝いや
勉強を教えてもらっているという。

「ふくん、そつか、じゃあ今日はリイムが先生だ。」

「うん、そうなるかな。」

じゃああその部屋で
あられもない姿になつてくれるかな?。」

「……………ん?。」

「これも久々な気がするね……。」

リイムの姿が人の姿からスライム特有の半透明なゼリー状の姿になると、下半身が溶け広がりその一部が全裸のアイシヤの体に纏わりつき、極薄のスライムラバーに変化する。

「……。」

「ん？、どうした？」

首から下をリイムのスライムラバーに包まれたアイシヤの胸のタロスがリイムが突然撫で始める。

「これ、大丈夫かなって……。」

「……、二体いつの話してんのよ、とっくの昔に治ってるよ。」

「色々分かってくると、あの時酷い事しちゃったんだな、と思っさ……。」

特区入りした時、リイムは人間の事があまり分かっていなかった。でも特区で暮らすようになり様々な人と関わり色々理解していく中で、一歩間違えたらアイシヤを殺していたかもしれないあの時の事を最近になってとても悪い事をしてしまったと分かるようになったのだという。

「今日は頑張るからさ、ボクの事信じてくれるとうれし、
ぷやん！」

アイシャがリイムの頭を少々強い加減で
撫でまわすとスライム特有の柔らかさで頭が歪み、
可愛らしい声がある。

「ちよつ…と！、アイシャつ、
頭、ゆがむう、やめーてー!!!。」

「あたしがそんな事根に持つかよ、
それよりもそういうのが分かってきたっていう
方が嬉しいよ。」

今日はお願いな。」

「…うん、じゃあ始めるね。」

頭の形を戻してはにかむリイムは足元に
広がるスライムの一部を変形させる。

(…?)。

なんとなく既視感のある床にそそり立つそれに
これどうするのかな?と単純な興味を抱くアイシャに
リイムは当然の事のようにそれをどうするか教えてくれた。

「じゃあ、これをお〇んこに自分で突っ込んで。」

「…うん、わかつ…
んん!!!??.」

「んっっ」



「そろそろ、アイシヤがHだなと思う感じだね、
いっよアイシヤ、とってもHだよ。」

「んっ、
リイムさ、今日は任せるって言ったけど…これには
どんな意味が?」

「ボクのテンションとかやる気が凄い上がる!!」

「せんせ、この体勢辛いんでやめてほしいですか?」

「あ、ごめんね、じゃあこういう感じでどう?」

正直この膣内をスライム棒で満たされている状態でも
アイシャの身体能力ならば体勢が苦という事は無い。
半分冗談で辛いと言ってみただけだが、
リイムは即座にアイシャを包む極薄のスライムを変化させ
アイシャの体をしっかりと支えてくれる。

「挿入してるのは少し振動してるけど。」

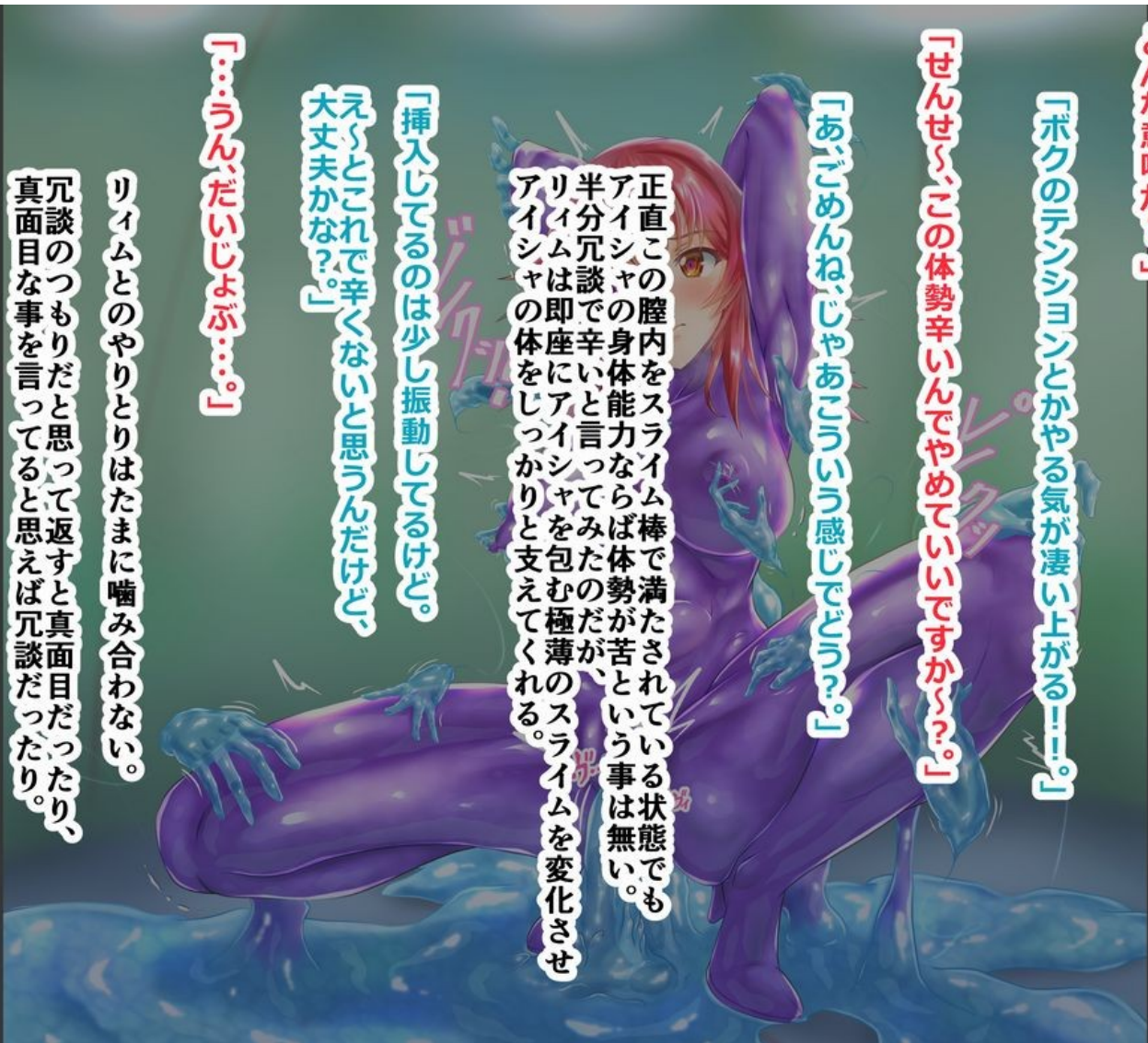
え、とこれで辛くないと思うんだけど、
大丈夫かな?」

「…うん、だいじよぶ…。」

リイムとのやりとりはたまに噛み合わない。

冗談のつもりだと思って返すと真面目だったり、
真面目な事を言ってると思えば冗談だったり。

特に今のような時にはどうにも
自分が大人げない事を言っているように思えて
アイシャはきまりの悪さから少し口ごもってしまう。



「そーい、これ凄いな。」

「ちよつとレントっぽいでしょ、切り離せてるわけじゃないけどな。」

アイシヤの下に広がるスライムから生み出され宙に浮くと手。実際それは極めて細いスライムで繋がっているのだが、まるで遠隔操作しているように見える。繊細なスライムの操作に感心するアイシヤ。

「所で、今日までにいつもより敏感になつちやつた力所とかある。」

「ん、特にないかひゃんつ!!。」

リイムのスライムハンドに内ももを軽く撫でられ、アイシヤの口から可愛らしい声上がる。

「結構敏感になつてるじゃん。」

「じゃあこれからする事説明するよ。」



神経に絡まる淫気の根の除去手術。

その物理の枠を超える悪辣な代物は、世界一の技術を誇るヴァルブレオスでも処置不可能とされたのだが、唯一状況を打開できる人物がいた、それがリイムだった。

リイムはその出自が人造のマーゴだったが、
紆余曲折の果てに通常のスライム型マーゴとは
違う進化を遂げていた。

それはリイム自身が自分の事を知りたいと言いつつ始め、
それに主治医が協力した事で分かっていったことなのだが、

リイムは通常のエネルギー以外に
マーゴの淫気も吸収する事が可能だった。

それ以外にも吸収したエネルギーの持ち主との
親和性が高ければその相手の体に

融け入り込めるという特性があり、

特にアイシヤはリイムが初めて摂取したエネルギーの持ち主

だからなのか親和性が最も高いという事が
分かった。

運命のような好条件、
今回の手術にはリイム以外適任はいないと判断した主治医。

だがリイムは勿論医者でもなければ手術をした経験も無い為
リイムへの指導も含め方々手を尽くし
今回の手術を行える運びになったのである。

「今からアイシヤを気持ちよくしてイク時のドレインと一緒に淫気の根を僕が食べて取り除くから。」

アイシヤは「うん、じゃあイキそうになったら、イクって出来るだけHな感じで言って。」

「んっ…え!?!…やだ。」

「え、なんでさ、アイシヤが気持ちよくなってる方が取りやすいんだよ。」

「あつしがイッた時なんてリイムだったらこのラバーで分かるでしょ?。」

説明しつつもスライムハンドでアイシヤの体を熟知したような絶妙な加減で体中を撫でまわし、頬が紅潮し始めた頃合いでリイムからそのような事を言われるがなんとなく恥ずかしかった為拒否してしまう。
勿論どうしても必要だというならば我慢してやるつもりだったが…。

「うん。」

「あつさり認めやがって、じゃあそれでやってよ、なんか恥ずしい。」

「も、そつちの方が盛り上がるのに、困った患者さんだなく、じゃあこれ使おうかな。」

アイシヤの目の前に謎の画面が表示される。

「これはアイシヤの体をモニターしている画面だよ。」

「えっ!? そんな事してんの!?!」

「だってこれって手術だし、患者の体をモニターするのは当たり前でしょ?。」

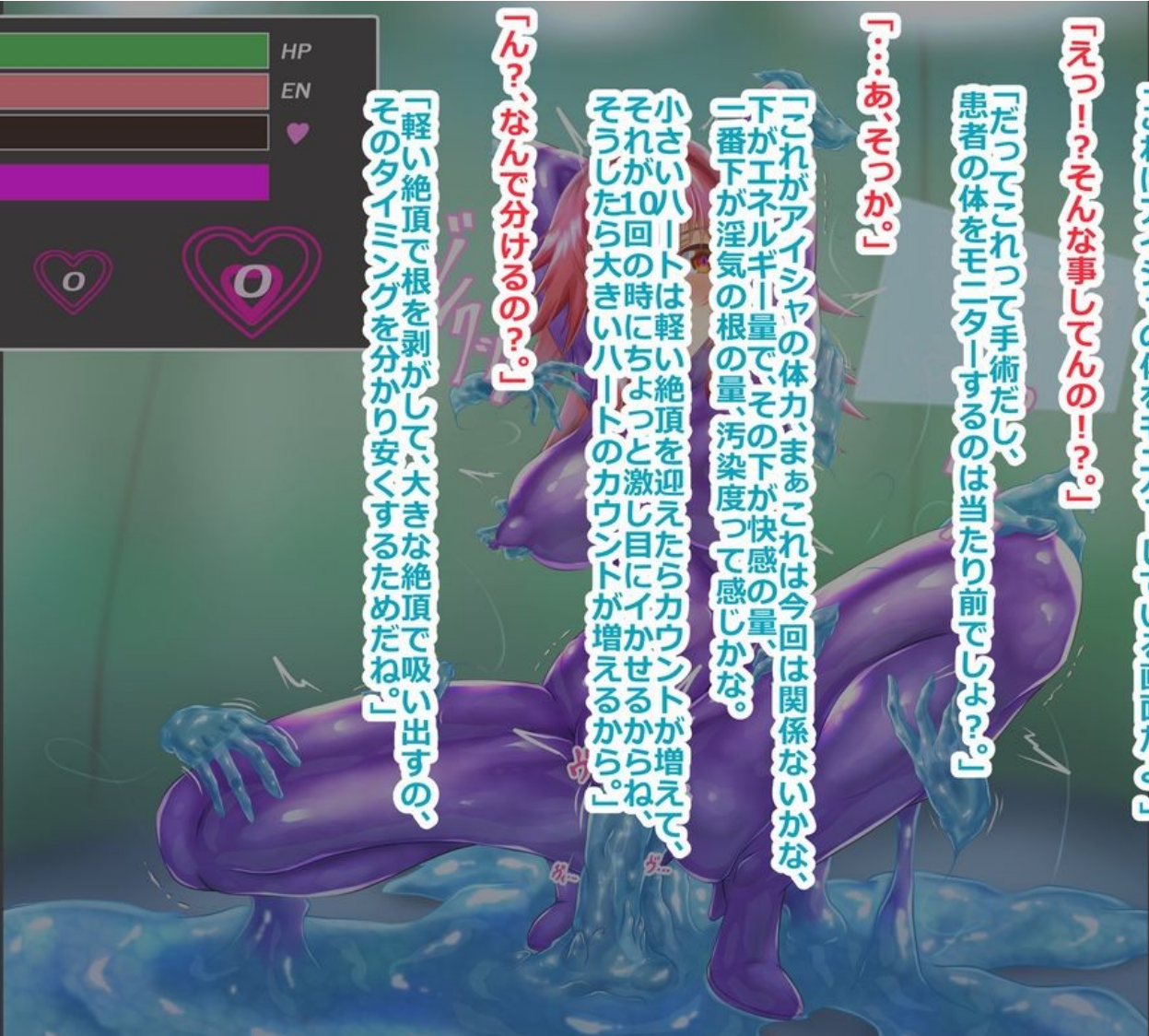
「…あ、そっか。」

「これがアイシヤの体力、まあこれは今回は関係ないかな、下がエネルギー量で、その下が快感の量、一番下が淫気の根の量、汚染度って感じかな。」

「小さいハートは軽い絶頂を迎えたらカウントが増えて、それが10回の時にちよつと激し目にイカせるからね、そうしたら大きいハートのカウントが増えるから。」

「ん?、なんで分けるの?。」

「軽い絶頂で根を剥がして、大きな絶頂で吸い出すの、そのタイミングを分かり安くするためだね。」



「あとマーゴハンターってよくHな目に合うから普通の絶頂でもイッたと感じないくらい我慢強いらしいんだよね、アイシヤの体、結構敏感になってるけどこれで生活出来るんでしょ？」
普通はまともでいられない数値らしいよ、今のアイシヤ。だからそれを利用してようって事なんだよ。」

「でもでもリイムく、これ、やめない？」

画面の事をテキパキと説明するリイム、ただ当のアイシヤは自分の体を探られているようで、なんともいえない気分になるので画面を消してもらえないかとお願いする。

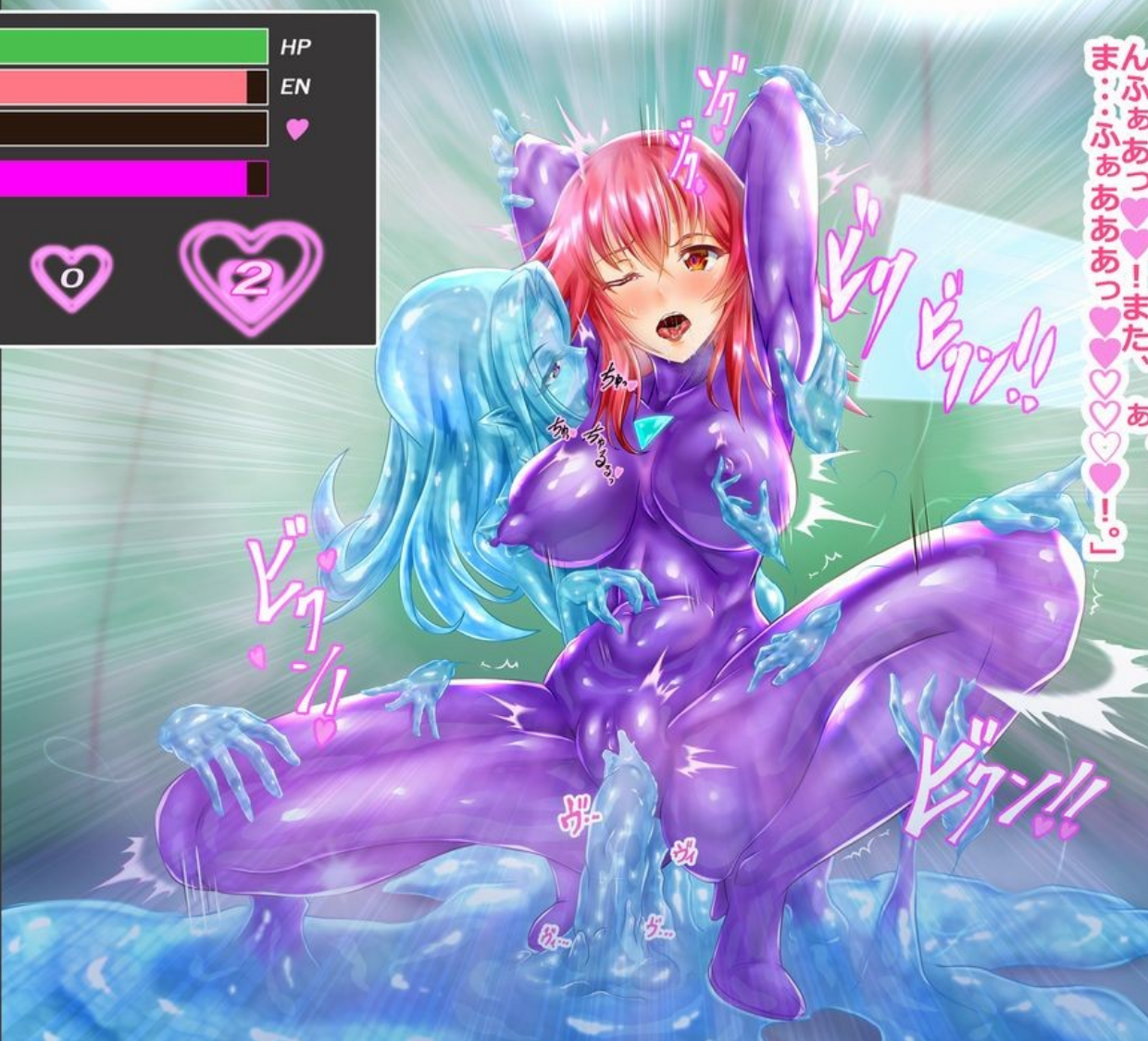
「アイシヤ、今日はあつちで先生がモニターしてくれてるけど、何度もイカせるだろうからってこの部屋にはボクじかないんだよ、頑張つてアイシヤを助けたいから協力して、ね？」

「う……いめん。」

まるで注射を怖がる子供を言い聞かせるようにアイシヤを窘めるリイム。
流石にここまで言われてしまったのはアイシヤも覚悟を決める事にしたのだった。



	HP
	EN
	♥



「やつ!?!、りいむ?、だつ!」
 んふああつ♥!また、あ
 ま:ふあああ♥♥♥♥♥!

「やっぱりボクも参加したくなっちゃった。」

「ふやっ♡!!、ダメっ、リイムっ、
そんな吸いつづけ、…っ、う、ああ、
わきっ、
んふあっ♡♡♡!!。」

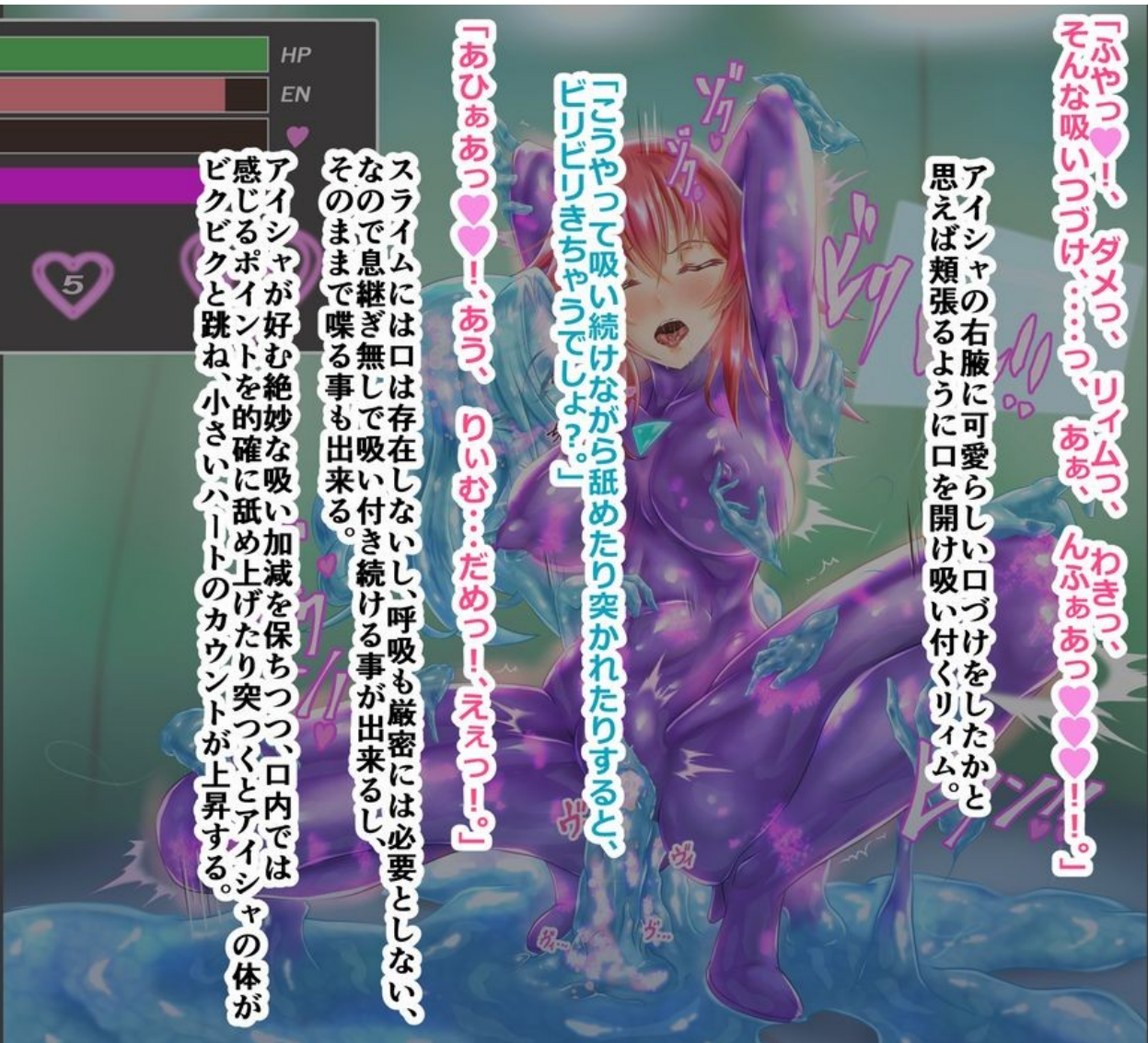
アイシヤの右腕に可愛らしい口づけをしたかと思えば頬張るように口を開け吸い付くリイム。

「こうやって吸い続けながら舐めたり突かれたりすると、
ビリビリきちゃうでしょ?。」

「あひああっ♡♡!!、あう、
りいむ…だめっ!!、ええっ!!。」

スライムには口は存在しないし、呼吸も厳密には必要としない、
なので息継ぎ無しで吸い付き続ける事が出来るし、
そのまま喋る事も出来る。

アイシヤが好む絶妙な吸い加減を保ちつつ、口内では
感じるポイントを的確に舐め上げたり突つくとアイシヤの体が
ビクビクと跳ね、小さいハートのカウントが上昇する。



「んひあっ……うあ……んああ……んっ♡」

「アイシヤの膣内はボクのが子宮の入り口まで
コネコネしてるでしょ、
それに合わせておへソを震わせるとお腹の中で合わさって
気持ちいいでしょ？」
「んひあっ……んっ♡」



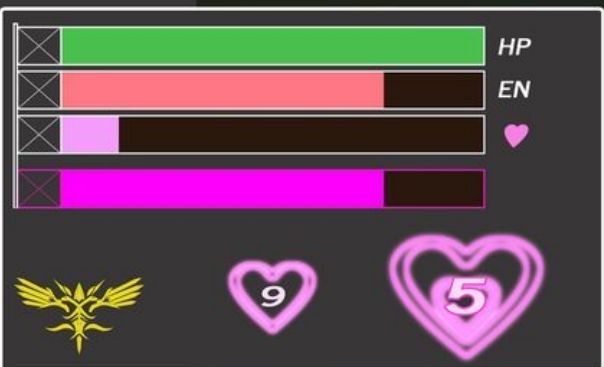
膣内にミツチリと詰まったスライム
は軽く振動をじ続けていたのだが
その実、アイシヤの弱い部分を
極めて的確に執拗に蕩かしており、
それが外側の刺激と絡み合う事で
アイシヤの体は敏感な子宮から
いともたやすく籠絡されてしまう。

「とんっ。」

「んひあっ♡♡♡」

リイムの中指以外の指が
アイシヤのお腹を軽く叩く、

音も殆どしないような軽い衝撃だが
11回だけのそれで
アイシヤの腰がビクンっ！と跳ねる、



「とん、とん、とーん。」

「んひゅっ♡♡♡あぁっ♡♡♡んっくぁぁぁあっ♡♡♡」

更に4本の指でアイシヤのおへソ周辺を叩くとアイシヤの口から甘い音色が響き、数字のカウントの上昇が止まらなくなる。

「やんまーんひゅっ♡」

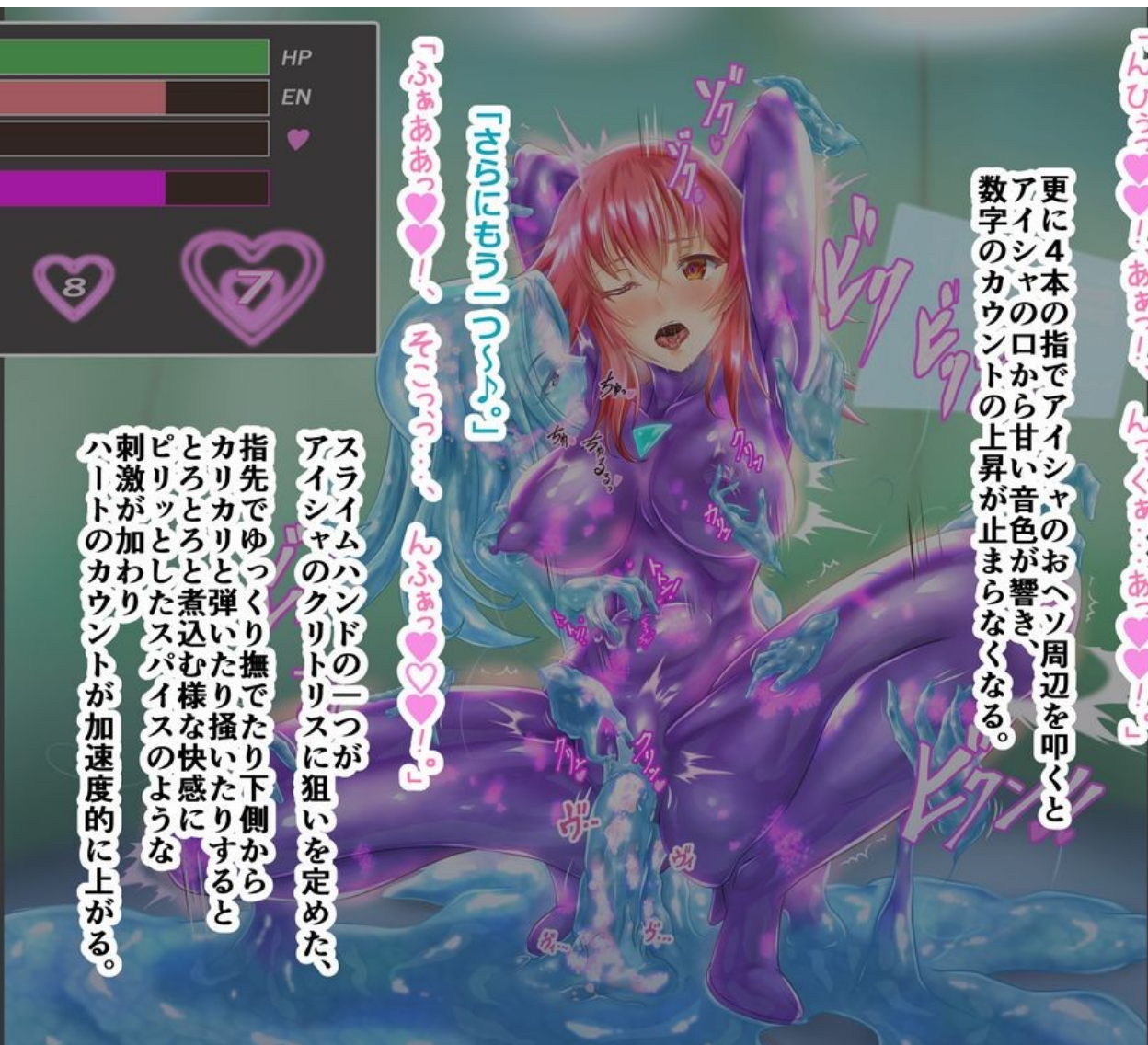
「ふぁあぁっ♡♡♡そいっ♡♡♡んふぁぁっ♡♡♡」

スライムハンドの二つがアイシヤのクリトリスに狙いを定めた、指先でゆっくり撫でたり下側からカリカリと弾いたり掻いたりするととろとろと煮込む様な快感にピリッとしたスパイスのような刺激が加わりハートのカウントが加速度的に上がる。

HP
EN

8

7







「ん……ん……ふ……。」

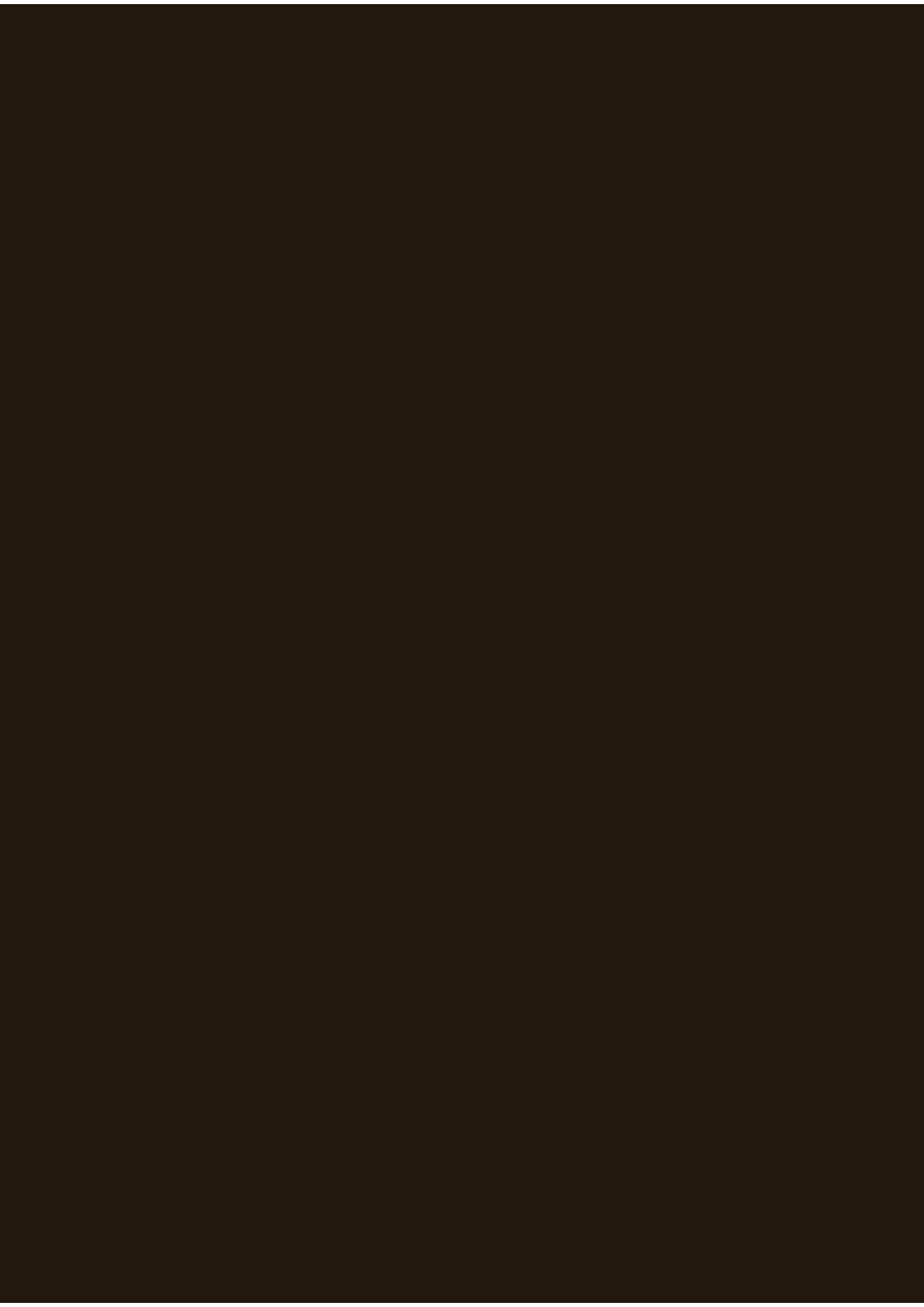
体の中を深く満たしたスライムの全てが蠢き始めると、一旦収まっていた快樂の熱が再び湧き上がってくる、

だがその熱は先程までのピリツとした刺激とは異なり、大きなお風呂で手足を伸ばした状態でリラックスした時に感じるゆつたりとした心地よさがあり、自然と目を閉じると体の表面を触れるスライムの感覚や耳の中を満たすスライムがくちゅりクチュリが蠢く音が心地よく響く。

「んんっ……ふむう……これ、いいな、きもち……いい……。」

アイシヤの腰がビクつと跳ねる、緩やかな快樂は大きくも温かい絶頂をアイシヤに与えるが、弾けるような刺激ではない為かアイシヤは軽く体を震わせ目を閉じ甘い呻きを上げ感じ入る。

HP
EN
♥
8
33



「お疲れ様アイシヤ、せくぶんぶ取れたよ!。」

アイシヤの状態をモニターする画面にはエネルギーの量と汚染度を現すゲージが0になっていた、

「はへっ♡……♡……♡……♡」

リイムに手術の成功を報告されても、蕩けに蕩けきった体と頭では返答など出来ようはずもなかった。

その後も中々アイシヤの絶頂が止まらず、止めようとリイムが優しく触れたり頭を撫でるだけの後戯でもイッてしまい、少し慌てたのだが、なんとか大きいハートの数字が150に至る前に止まった。

ようやく落ち着いた所でリイムはアイシヤを主治医に受け渡し、最初の時よりも詳しい検査を受け、結果アイシヤの体内に絡みつく淫気の根は全て除去されていた。

当初は流石に欠片くらいは少し残ってしまおうと予測されていたが、シュミレーションでさえ一度たりとも失敗しなかったリイムに取りこぼしなどあり得る筈も無く、欠片すら残さない100%を超えるその仕事ぶりには主治医も舌を巻いた程だったという。



HP	██████████
EN	██████████
	██████████
	██████████



「ねえアイシャ、最後凄く積極的だったけど、そんなに気持ちよかった?」

「んー、まあね…、? あ。」

「どういう感じですか?!、ねえねえ今後の為に聞きたいな、ねえ、ね。」

ロビーで2人並んで座っている所で、リイムから先程の事を聞かれ、エネルギが空に近い状態でかつ直近の大問題が解決した安堵感からアイシャはぼーっとしていたままに答えてしまい、しまったと思った時にはすでに遅く、目を輝かせたリイムが詰め寄ってくる。

「あーっ!、なんか空っぽになるまで搾り取られたからお腹すいたなー! 今日リイムが奢ってーっ!」

「えっ?!、ほんとに!、ボク友達にご飯奢るのやってみたかったんだよ、やったー!、どこいくどこ行くー!」

実際搾り取られたおかげで大分お腹が減っていたので、それを理由に無理矢理会話を終わらせようとしたのだが、何故かそれはリイムにとって喜ばしい事だったようで…。

リイムとはたまに噛み合わない。

「リイム、今日はありがとね、あんたがいてくれて助かったよ。」

ただど友達なのだからこの言葉くらいはきつと噛み合うはずだが…。

もし噛み合わなくても面白いしね。と自然と頬が綻んでもうアイシャだった。